

III 遺物

1. 土器

調査区全域から、多量の奈良時代の土師器・須恵器が出土した。平安時代の土器は、3次東と2次の調査で比較的多く出土している。他に13世紀以降の瓦器・土師器が3次西と2次調査で少量出土した。奈良時代の土器はS K 2270とS K 2800で多く出土し、平安時代の土器はS D 2690及びS K 2680で多く出土している。包含層出土の土器は施釉陶器類に限り、以下では遺構出土の土器について説明する。なお、土器の器種名・製作技法の分類と呼称については『平城宮発掘調査報告』に従う。

1次出土土器 (PL. 8・9、fig. 9~11)

S K 2270出土土器 S K 2270は土層からは上層・下層に分離できるが、遺物の上からは明瞭な差はなく、一括して扱う。

土師器 杯A・杯B・杯C・皿A・椀C・鉢A・壺A・甕Aがある。杯A II(1・2)は、底部外面調整法に2手法ある。1は底部外面をとくに調整せず、口縁部外面をへら磨きする a_1 手法。2は底部外面をへら削り、口縁部外面をへら磨きする b_1 手法。ともに内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。1・2は平城宮I群土器。杯A III(3)は b_1 手法。内面にラセン暗文・放射暗文・連弧暗文をもつ。平城宮II群土器。杯B(9)は口径22.5cmの大形の器形。底部は現存しないが、口縁部外面下半をへら削り後、へら磨きする。内面にラセン暗文・二段放射暗文をもつ。I群土器。杯C II(8)は、小さな丸底と斜め上にひらく口縁部からなる。底部外面を不調整で、へら磨きのない a_0 手法。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。II群土器。皿A I(6)は a_0 手法で底部外面に木葉圧痕を残す。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。皿A II(4・5)は、 a_1 手法(4)と a_0 手法(5)とがある。ともに内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。4・5はII群土器。皿A III(7)は a_0 手法。内面の暗文はない。II群土器。鉢A I(11)は底部から口縁端部に至る外面全体にへら削りをおこない、口縁部外面にへら磨きを行なう C_1 手法。内面に二段放射暗文をもつが、ラセン暗文の存否は不明。II群土器。鉢A III(10)は C_1 手法。内面の暗文はない。II群土器。甕A III(12・13)は体部外面を縦ハケメで調整した後、頸部と口縁部の内外面をヨコナデして仕上げる。

須恵器 杯A・杯B・皿A・鉢A・盤A・壺B・甕A・甕Dがある。杯A II(22)は底部外面と口縁部下半をへら削りし、口縁部内外面に火襷がある。杯A IV(14)は底部外面へら削りのままで不調整。杯B I(17)は口径26.3cmの大形の器形。底部外面をへら削りした後、ロクロナデで仕上げる。口縁部外面に墨書があるが、文字不明。杯B II(19・20)は器高7.65cmの杯(20)と器高6.2cmの杯(19)とがある。図示していないが、20は底部外面をへら削

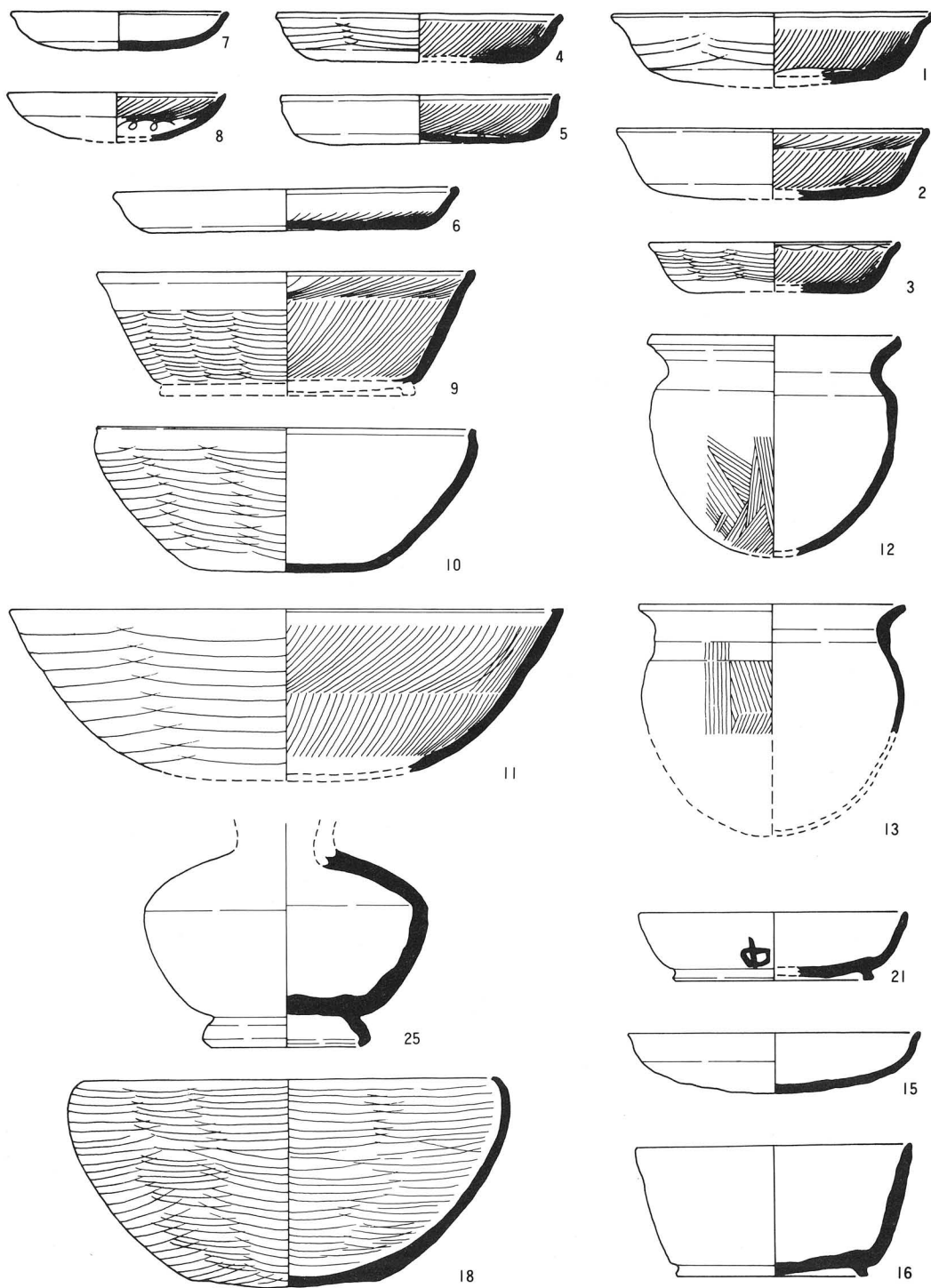


fig. 9 SK2270出土土器実測図(1) 縮尺 $\frac{1}{4}$

りする。底部外面を硯として使用した転用硯。19は底部外面をへら削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅢ(16・21)は器高7.8cmの杯(16)と器高4.1cmの杯(21)がある。16・21とも底部外面をへらキリ後、ナデで仕上げる。16の底部外面には漆が付着する。21の口縁部外面下半には「中」の墨書がある。皿A(15)は底部外面を不調整で、木葉圧痕を残し、口縁部外面をヨコナデして仕上げる。内面に暗文なく、外面にへら磨きは施さないが、土師器の手法をとるもの。鉢A(18)は丸底と内彎する口縁部からなる半球形の器で、いわゆる鉄鉢。口縁部の内外面に横位のへら磨きをおこなう。盤A(26)は底部外面が平坦面をなし、底部と口縁部との境が稜角をなして強く外反する口縁をつける浅い器。一對の三角形曲折把手をつける。口縁部外面上半から内面にかけてはロクロナデによって調整し、口縁部下半から底部周縁にかけてはロクロ削りをおこない、底部中央はナナメ方向のケズリによって仕上げる。壺B(25)は長頸壺の体部のみ残存。高台端部は内傾する。体部外面の肩部以下に、平行叩き目を施し、へら削り後、ナデで仕上げる。底部外面はナデで仕上げる。内面に漆が付着し、漆の容器として使用。甕A(23)は卵形の体部に外反する口縁部をつけたもの。体部外面は平行叩き目を施し、体部外面上半は平行叩き目をカキ目で消す。内面は中央に十字形の刻みある同心円文のあて板痕跡をとどめる。甕D(24)は広口に開く口縁部と器高の低い体部からなり、高台を有する。頸部に半環状の四耳をつける。体部外面に平行叩き目、内面に同心円文を残すが、ロクロナデにより消された部分が多い。

S K 2286出土土器 土師器杯A・皿A、須恵器杯B・蓋A・椀Aがある。

土師器 杯AⅡ(29・30)には、器高が4.2cm(29)と3.5cm(30)とがある。29はa₀手法でI群土器、30はC₀手法でII群土器。皿AⅡ(31)はC₀手法でII群土器。皿AⅢ(32)は、外面をC₀手法で調整し、内面もへらケズリする特異なもの。II群土器。椀A(34)はC₁手法。

須恵器 蓋A(33)は頂部上面をロクロナデで仕上げる。口縁端部の断面はS字形に屈曲。

S K 2285出土土器 土師器皿A・椀A、須恵器杯B・高杯・壺・盤がある。

土師器 皿AⅡ(35)、皿AⅢ(36)、椀A(37)ともにC₀手法。

須恵器 高杯(38)は杯部のみを残す。杯部外面下半をへらケズリ後、口縁部内面と杯部外面をロクロへらケズリして仕上げる。杯部内面はヨコナデ調整後に、格子状にハケメを施す。

S B 2263出土土器 土師器皿AⅡ(39)が柱掘形から、椀A(40)と壺B(41)が抜取穴から出土した。

皿AⅡ(39)はa₀手法でI群土器。椀A(40)はC₃手法で、外面全体にへら磨きをおこなう。壺B(41)は上端がやややすばまる扁平な器体に、短く外反する口縁部をつけた広口の壺。内外面ともにナナメ方向のハケメを施し、口縁部内外面をヨコナデによって仕上げる。I群土器

S D 2281出土土器 土師器杯A・皿A・蓋A・椀A・高杯、須恵器杯B・蓋が出土した。

土師器 杯AⅡ(42)はC₃手法でII群土器。皿AⅡ(45)はC₀手法でII群土器。皿AⅢ(46)は



fig. 10 SK2270出土土器実測図(2) 縮尺 $\frac{1}{4}$

C₀手法でII群土器。椀A(43・44)はC₀手法でII群土器。蓋A(47)は断面形が笠形を呈する。外面をへら磨きする。

S K2287出土土器 土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯A・蓋A・高杯・壺・甕がある。

須恵器 高杯(49)はラッパ状に開く脚部をもつ。脚部外面をロクロヨコナデにより仕上げる。

S K2286出土土器 土師器高杯が3個体出土。

いずれも脚部のみの破片で、円筒接合のa手法が1点(51)、芯棒接合のb手法(50)が2点ある。

3 次東出土土器 (PL.10、fig.12)

S D2690出土土器 土師器杯A・杯B・皿A、須恵器皿A・摺鉢、灰釉陶器皿B・皿E、緑釉陶器杯Bがある。

土師器 杯A(54)は高さ3.9cmと器高が高い。C手法による。杯B(55)は口縁が広く開き、底部に低い高台のつく器形だが、高台部が剥落している。C手法で調整。杯内面に漆が付着しており、漆の容器として使用。皿A(57)はC手法。

須恵器 皿A(59)は口径11.8cmの小型の器形。底部外面をへらキリのまま不調整。内面と口縁部外面をロクロヨコナデにより仕上げる。摺鉢(60)は底部と体部の一部をとどめる。外面をロクロヨコナデにより仕上げる。

灰釉陶器 皿B(66・67)は扁平な体部に高台のつく器形。66の高台は断面が分厚く低い。67の高台は三角形を呈し薄く高い。2点ともロクロナデが口縁部外面の全体におよび、内面の全面に灰緑色釉を厚くかける。皿E(64)は皿の口縁を折り曲げて耳皿としたもの。器の内外をロクロナデとし、高台はつけない。底部に明瞭な糸切痕を残す。

緑釉陶器 杯B(65)は底部外面をやや凹面をなす円板状に削り出したもので切り高台。全面に暗緑色の釉をかける。硬陶。

S K2680出土土器 土師器皿A・灰釉陶器杯Bがある。

土師器 皿A(56)はC手法。

灰釉陶器 杯B(61・62・63)はやや内彎する体部に高台のつく器形。いずれもロクロナデが口縁部外面の全体におよんでいる。61は内面の全面に灰色釉を薄くかける。62は内面に灰緑色の釉を厚くかけ、外面の口縁部上半に灰緑色の釉を薄くかける。63は内面の全面に灰緑色の釉を厚くかけ、底部外面に「ニ」の墨書がある。

S B2630出土土器 土師器椀C・壺B、須恵器杯B蓋・壺A蓋がある。

土師器 椀C(69)は内面全面と口縁部上端の外面をヨコナデし、以下を不調整のままにし、底部外面に木葉圧痕をとどめないe手法。壺B(70)は外面に横位のへら磨きをおこなう。

須恵器 杯B III蓋(71)は頂部がまるく笠形を呈する。頂部外面をへらケズリし、ロクロナデで仕上げる。壺A蓋(72)は頂部から垂直におれる縁部をもつ。縁部内端を下方に突出さ

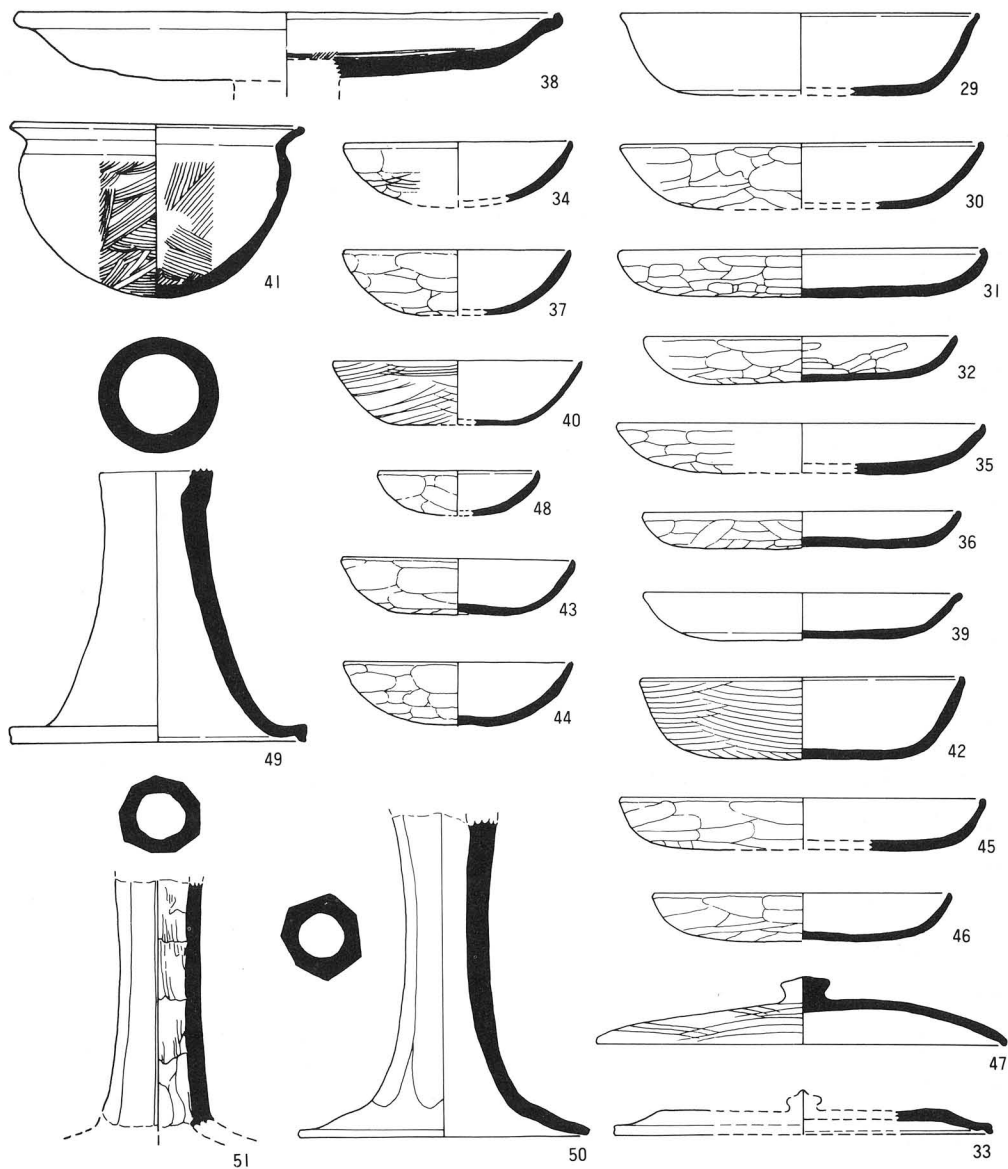


fig. 11 第1次調査出土土器実測図
縮尺 $\frac{1}{4}$

S K 2286(29~34)・S K 2285(35~37)・S B 2263(39~41)
S D 2281(42~47)・S K 2287(49)・S K 2286(50・51)

せて外側に段をつくる。

S B 2631出土土器 土師器皿A・蓋Aが出土。

皿A(74)はC手法。蓋A(73)は断面形が笠形を呈する蓋。外面全体にヘラケズリを行なう。

S B 2640・S B 2670・S B 2655出土土器

土師器皿A(75)はS B 2640出土。e手法による。口縁部上半が強いヨコナデにより屈曲する。縁釉陶器杯B(76)はS B 2670出土。口縁と底部との間がやや屈曲する。高台は円形の挟りの部分が広く、高台の断面が円形を呈する。黒色土器杯B(77)はS B 2655出土。土

器の内面が黒色化する黒色土器A。外面上部にヨコナデを施し、それ以下は調整をおこなわない。口縁部内面は水平方向に丁寧なヘラ磨きをおこなう。

S K 2643出土土器 土師器皿A・須恵器壺Hが出土。

土師器皿A(78)はC手法。須恵器壺H(79)は口縁端部が屈曲する。口縁部内外面をロクロナデで仕上げる。

S K 2666出土土器 須恵器杯A・杯B・椀・皿Aがある。

皿A(80)は底部外面をヘラケズリし、口縁部内外面をロクロナデで仕上げる。

包含層出土土器

灰釉陶器小形横瓶(68)は体部上半と口頸部に釉が付着。自然釉の可能性もあるが、ここでは灰釉陶器とする。横幅6.7cm、高さ4.7cmの小型品。体部両端をしぼり、両端外面を削って尖らせ、中心に円孔を切り、口頸部をつける。灰釉陶器杯B(81)はロクロナデが口縁の内面と外面の全体におよぶ。内面の全面に灰緑色の釉を施す。

緑釉陶器(82~84)は、高台の底部外面を凹面をなす円板状に削り出した後、ロクロヘラケズリによって調整する。84では、底部外面をさらにヨコナデする。82の素地は暗灰色硬陶で、全面に濃緑色の釉を施す。83は口縁部外面をヘラケズリ後、ロクロナデで調整。素地は灰白色軟質で緑色の釉を施す。84はロクロナデが口縁の内面と外面の全体におよぶ。素地は灰色硬陶で、淡緑色の釉を全面に施す。

2次出土土器 (PL.10, fig.13)

S K 2371出土土器 土師器杯C・小型壺、須恵器蓋A・鉢A・壺Bがある。

土師器 杯C II(85)は口縁部外面上半にヨコナデ、底部に指圧痕が残るが、保存が悪く、暗文及びヘラ磨きの有無は不明。小型壺(99)は広口で丸底につくる小型の器である。内外面ともナデによって仕上げる。底部内外面に指による押圧の痕跡がある。器外面には煤が付着する。

須恵器 蓋A III(86)は頂部上面をヘラ削り後、ロクロナデで仕上げる。内面も一部ヘラケズリをおこない、ロクロナデで仕上げる。鉢A(87・88)は内彎する口縁部をもつ半球形の器。87・88とも内面はロクロナデ。87は外面下半にロクロ削りをおこない、外面全体にロクロナデを施す。88の外面には横位のヘラ磨きを施す。壺B(89)は長頸壺の肩部以下をとどめる。平底で高台をつけ、高台は外傾する。底部外面にロクロケズリを行ない、底部内面には同じ円叩き目を残す。

S K 2379出土土器 土師器杯A・杯B・皿A・蓋A、須恵器壺E・鉢D、緑釉陶器杯Bがある。

土師器 杯A(95・97)は外面全体にヘラ削りを行なうC手法のもの(95)と、底部外面不調整で指による凹凸の痕を残すe手法のもの(97)がある。杯B(93)はC手法。口縁部は内彎し、外面のヘラ削りが口縁上部の屈曲部分におよんでいない。蓋A(91・92)には、頂部が

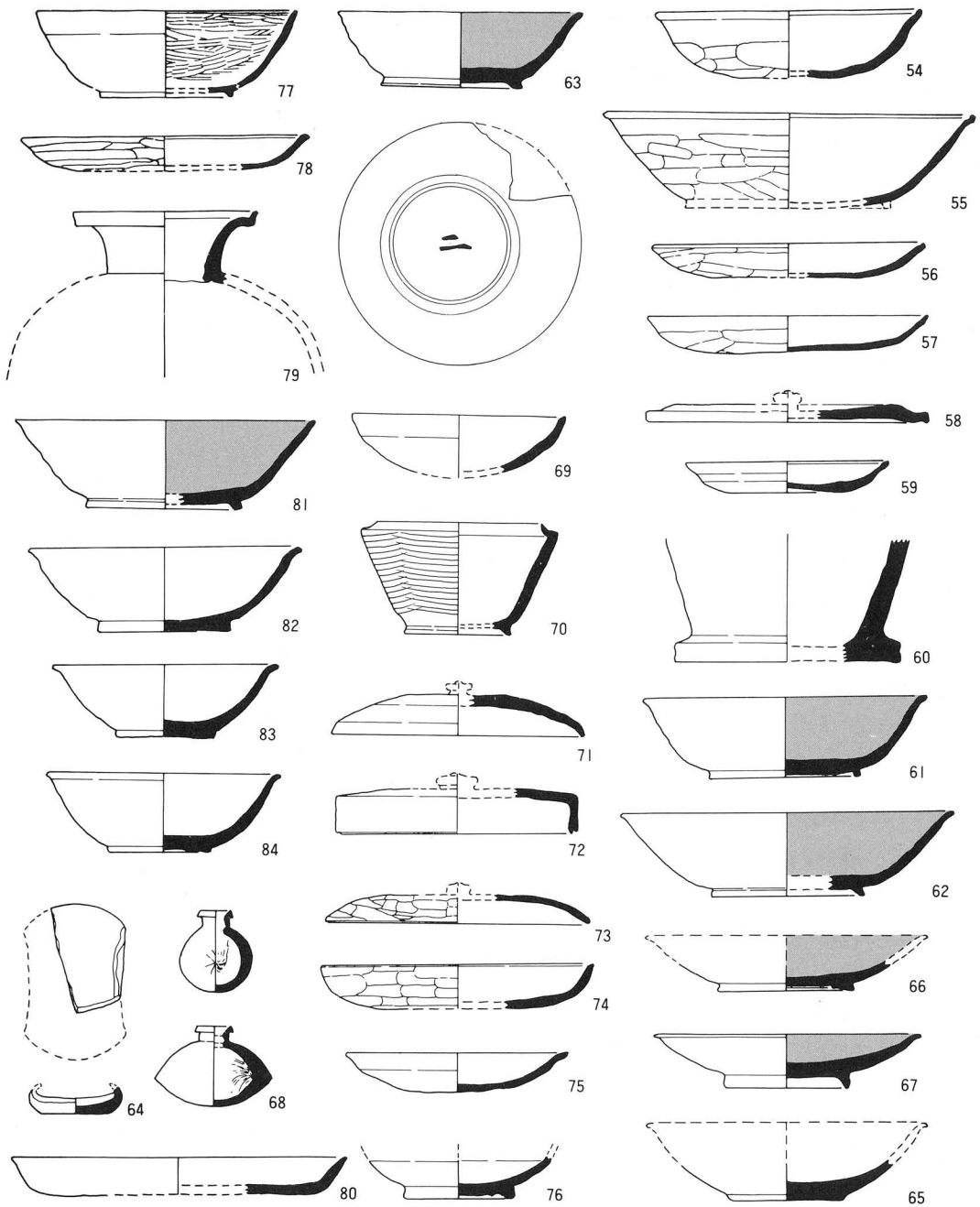


fig. 12 第3次東調査出土土器実測図 縮尺 $\frac{1}{4}$

S D2690(54・55・57~60・64~65)・S K2680(56・61~63)
 S B2630(69~72)・S B2631(73・74)・S B2640(75)
 S B2670(76)・S B2655(77)・S K2643(78・79)
 S K2666(80)・包含層(68・81・82~84)

平担面をなすもの(91)と断面形が笠形を呈する蓋(92)とがある。外面全体にヘラケズリを行なう。

須恵器 壺E(98)は平底のイチヂク形の体部に外反する口頸部をつけるもの。底部外面に糸切痕を残す。鉢D(99)は外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなるもの。内・外面をロクロナデで仕上げる。

緑釉陶器 杯B(100)は切り高台の中央を円形に抉った蛇の目高台。軟陶。

S K 2376・S K 2382・S K 2377出土土器

S K 2376出土灰釉陶器皿E(101)は皿の口縁を折り曲げて耳皿としたもの。器の内外をロクロナデとし、はりつけ高台。内面全面に灰緑色の釉を厚くかける。

S K 2382出土土師器皿A(102)はC手法。黒色土器甕(103)は外反する口縁部のみ残存する。黒色土器A。口縁部内外面にヨコナデをおこなう。

S K 2377出土土師器皿(104)はe手法。口縁部外面上半を強くヨコナデし、口縁部外面下半との間に明瞭な稜線が残る。

包含層出土土器

灰釉陶器皿B(105)は扁平な体部に高台のつく器形。ロクロナデが口縁部外面の全体におよぶ。内面の全面に灰緑色釉を厚くかける。

3次西出土土器 (PL.10・11、fig.14・15)

S K 2800出土土器 土師器杯A・皿A・蓋A、須恵器杯A・杯B・鉢E・蓋A・蓋B・羽甕・甕Dがある。

土師器 杯A II(106~108)はいずれも保存が悪く、ヘラ磨きは108のみ観察できる。106・107のヘラ磨きは復原。106は内面にラセン暗文・放射暗文・連弧暗文をもつ。107・108はラセン暗文・放射暗文をもつ。皿A I(111)はa₀手法。口縁端部が巻き込む。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。皿A II(109・110)は暗文のあるもの(109)とないもの(110)がある。109はb₂手法で内面に放射暗文をもつが、ラセン暗文の存否は不明。110はa₃又はb₃手法で、底部外面に一方向の入念なヘラ磨きを施す。蓋A I(112)は外面を横方向のヘラ磨きの後、頂部ではつまみを狭んで井桁状にヘラ磨きをおこなう。内面にラセン暗文をもつ。106、110~112はII群土器、107~109はI群土器。

須恵器 杯A IV(113)は口径8.9cmの小型の器形。底部外面はヘラキリのままで不調整。

杯B III(114)は底部外面をヘラキリのままで不調整。碗B(115)は器高10.25cmの深い器形。口縁部内・外面をロクロナデで仕上げる。鉢E(116)は平底で、長い口縁部が真直ぐ外方に開くバケツ状の器。口縁部内・外面をロクロナデで仕上げる。蓋B(117)は復原径33.6cmの大型の器形。頂部は笠形をなす。頂部外面をロクロ削り、縁部内外面をロクロナデで調整。頂部下面が磨耗して墨が付着しており「杯蓋硯」として使用。蓋A I(118・121・122)は頂部が平坦。118は外面をロクロ削り後、ロクロナデで調整。122は外面全体に自然釉付着。

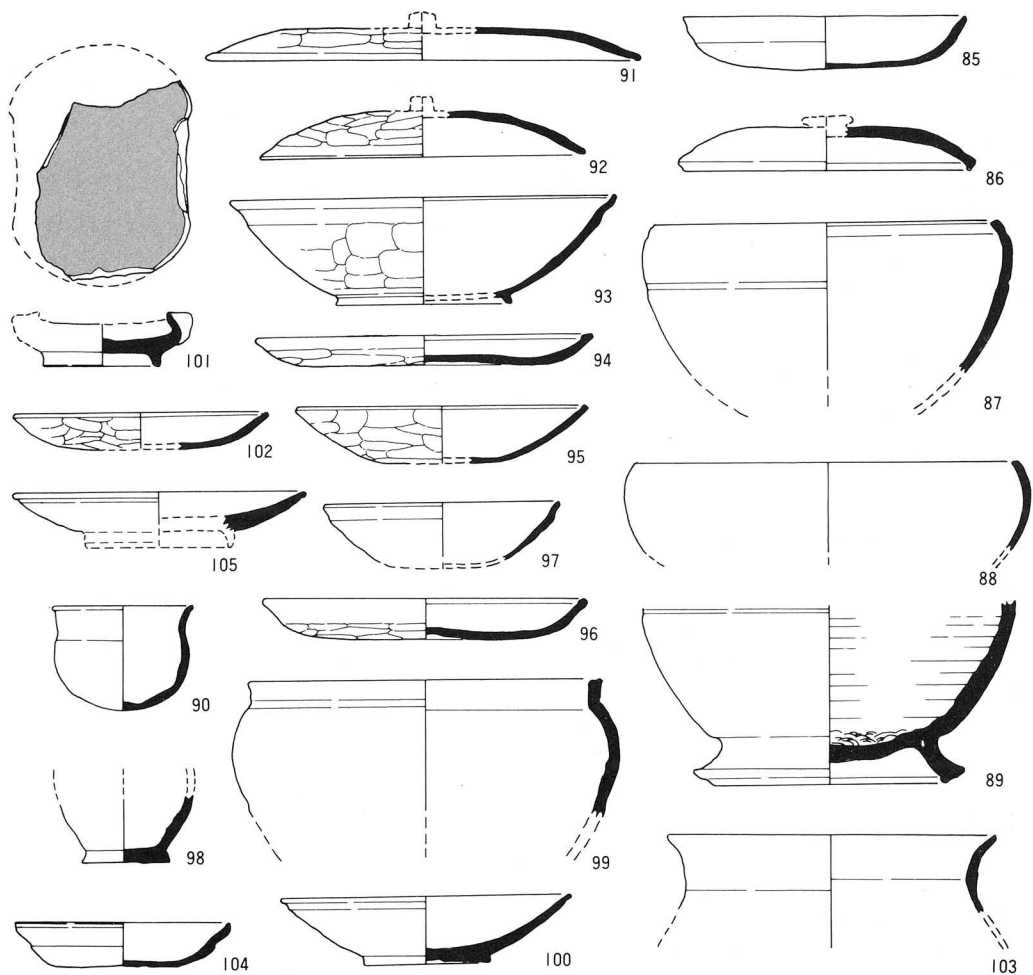


fig. 13 第2次調査出土土器実測図 縮尺 $\frac{1}{4}$

S E 2371(85~89)・S K 2379(90~100)・S K 2376(101)
S K 2382(102・103)・S K 2377(104)・包含層(105)

121は頂部をロクロ削り、内面をナデによって調整。蓋A III(119・120)は頂部が笠形をなすもの(119)と平坦なもの(120)とがある。119は内・外面をロクロナデで仕上げる。120は頂部をロクロ削り、内面をナデによって調整。羽甕(123)は甕体部中央に齔をつける。須恵器としては稀有の例。口縁部を短く直立させ、広口に開く器高の低い体部からなる。体部外面に平行叩き目を残す。体部内・外面を強いヨコナデによって調整し、内面には同心円文を全くとどめない。口縁部外面と体部最上部以外は、窯焼成時の灰をかぶっており、蓋とともに焼成されたことがわかる。甕D(124)は広口に開く口縁部と器高の低い体部からなるもの。体部外面下半は平行叩き目文をそのまま残し、体部外面上半はカキ目によって平行叩き目を消す。内面には同心円文を残すが、部分的にヨコナデによって消されている。

S D 2740出土土器 土師器杯A・皿A、須恵器蓋A・B・C・高杯・鉢Aがある。

土師器 杯A IV(125)は a_1 手法。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。底部には成形時の凹凸をとどめ、小枝状の圧痕を残す。内・外面に漆が付着する。I群土器。皿A II(126)は a_2 手法。内面にラセン暗文・放射暗文をもつ。I群土器

須恵器 蓋A III(128)は頂部をロクロ削り、内面をナデによって調整。蓋A IV(127)は外面をヘラケズリ後、ロクロナデで調整。焼成前に径7mmの円孔を1個穿つ。蓋B(129)は復原径30cmの大型の器形。器の内外面にロクロナデを施し、頂部外面にヘラ磨きを施す。蓋C I(130)は平坦な頂部に垂直で深い縁部をつけるもの。縁端部の内側が上る。頂部をヘラケズリで調整し、縁部の内・外をロクロナデする。鉢A(131)は丸底と内彎する口縁部からなる。外面にロクロヘラケズリを行ない、内外面にロクロナデを施す。

S D 2750出土土器 土師器杯B・高杯・甕、須恵器杯A II・蓋A・壺B・甕が出土。

須恵器 杯A II(134)は底部外面をヘラ切り後、ナデで仕上げる。蓋A II(133)は頂部をヘラケズリで調整し、縁部の内外をロクロナデする。壺B(135)は長頸壺で、細長い口頸部のみ残存。口頸部を2段構成で体部に接合。口頸部内外面をロクロナデで調整。

S K 2801出土土器 須恵器杯A IIIが出土。

須恵器 杯A III(136)は底部外面をヘラ切りのまま不調整。

S B 2363出土土器 須恵器杯A・蓋Aが柱抜取穴から出土。

杯A IV(137)は底部外面をヘラケズリで調整。蓋A III(138・139)は頂部が笠形のもの(139)と、平坦なもの(138)とがある。頂部をヘラケズリで調整し、縁部の内外をロクロナデする。

S K 2810出土土器 須恵器壺Cが出土。

須恵器 壺C(140)は肩部が張り稜角をなす低い体部に、外反する広口の口頸部と外傾する高台をつける。体部内・外面をロクロナデで仕上げる。

S K 2870出土土器 土師器杯A・蓋・高杯・甕、須恵器皿A・蓋A・鉢A・甕がある。

須恵器 皿A II(143)は底部外面をヘラケズリ後、ナデで調整し、口縁部内外面をロクロナデで仕上げる。蓋A I(142)は頂部をヘラケズリ後、ロクロナデで仕上げる。蓋A II(141)は頂部をロクロ磨きで仕上げる。

S D 2812出土土器 土師器皿A・椀A・壺B、須恵器壺E・托が出土。

土師器 皿A I(146)は b_0 手法。皿A II(147)は C_0 手法。椀A(148)は C_0 手法。壺B(145)は短く外反する口縁部をつけた広口壺。体部上面にヘラ磨きをほどこす。

須恵器 壺E(144)は斜め上に開く胴部と短い口縁部を付した広口壺。口縁部・体部内外面をロクロナデで仕上げる。托(149)は、受台と高台部を欠損する。内・外面をロクロナデで仕上げる。

S K 2861・S K 2764・S K 2720・S K 2732・S K 2726出土土器

S K 2861から瓦器椀、土師器皿が出土。瓦器椀(150)は口縁部上半のみの破片。口縁部上半に強いヨコナデ調整を施す。ミガキ調整は外面では口縁部下1cmについて横方向に粗く

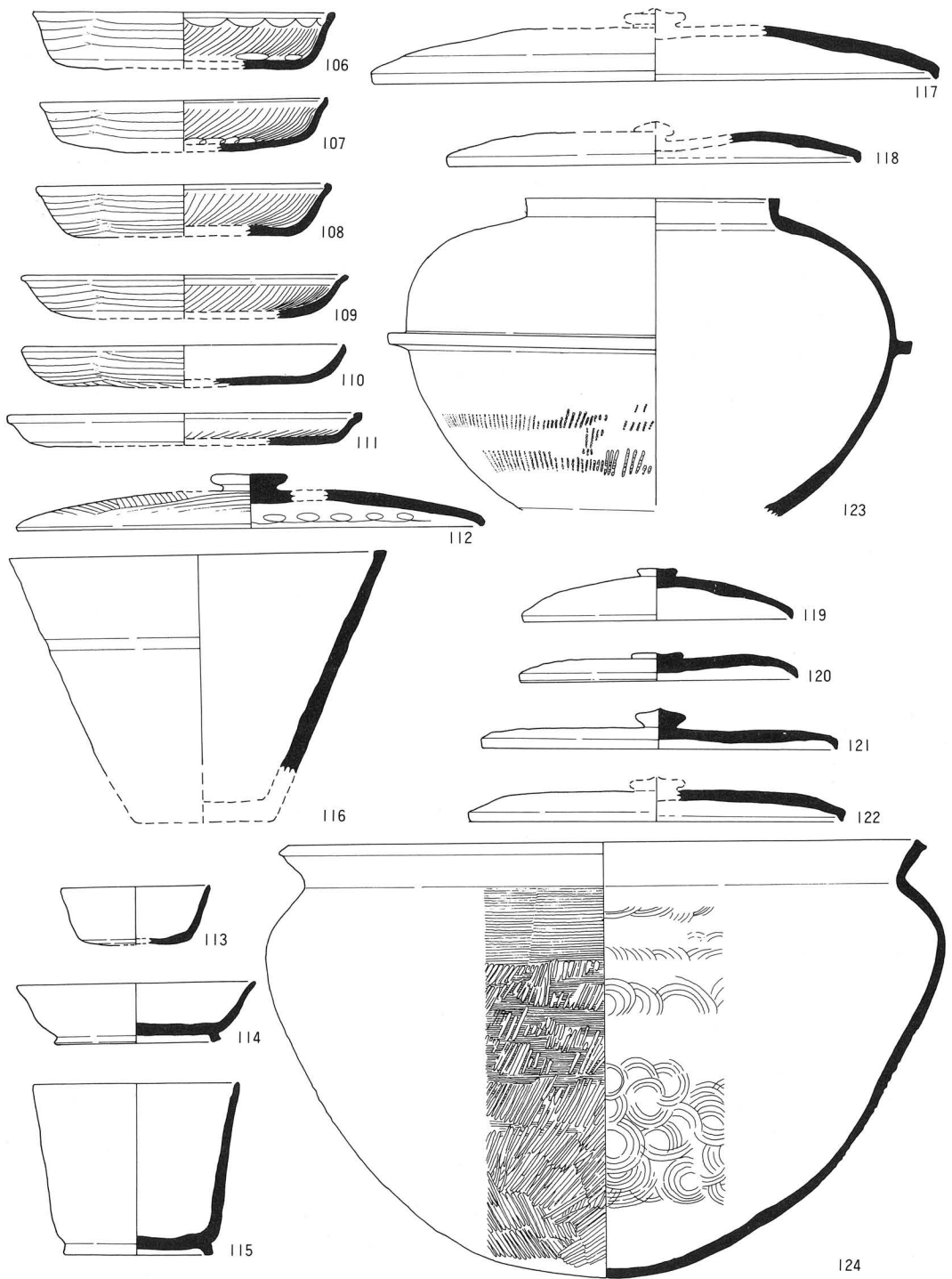


fig. 14 S K 2800出土土器実測図 縮尺 $\frac{1}{4}$

施し、内面には連続圏線を施す。土師器皿(151・152)は、底部外面を未調整で、口縁部外面を強くヨコナデして仕上げる。151は口縁部外面に糸切痕を残す。S K 2764から瓦器椀が出土。瓦器椀(153)は底部に断面三角形をした低い高台をはりつけ、口縁部上半に強いヨコナデを施す。ミガキ調整は、外面では口縁端部下1 cmについて横及び斜め方向に粗く施し、内面には連続圏線を施す。S K 2720から瓦器小皿が出土。瓦器小皿(154)は外反する口縁部をもち、内底面にはジグザグ状のミガキ調整を施す。S K 2732から土師器小皿が出土。土師器小皿(155)は、口径9 cm、器高1.3 cmの浅い皿。口縁部にヨコナデ調整を施す。S K 2726から土師器小皿が出土。土師器小皿(156)は、口縁部は肥厚し、底部はあげ底気味の形態をなす。口縁部上半に強い横ナデ調整を施す。

包含層出土土器

灰釉陶器 壺(158)は、体部上半の破片。内外面をロクロナデで調整。外面に緑灰色の釉を施す。

磁器 香炉蓋(159)は口縁部の破片。口唇部は身との接合を良くするため平坦に成形する。口縁部下半は幅広い3条の沈線をほどこし、上半部には透しを入れる。透しの形は不明。全面に灰緑色の釉がムラなく掛けられ、胎土は灰色で精製されている。

土器の年代

平城宮出土土器の編年と年代は『平城宮発掘調査報告』で明らかにしているが、それに従って、本調査区出土の土器を編年すると次のようになる。S K 2270・S K 2800・S E 2371出土土器は平城宮IIに相当する。S K 2270土師器の杯は螺旋暗文+1段放射暗文+連弧暗文が一般化し、須恵器の鉢Bを丸底につくる。S K 2800では土師器の暗文と共に、須恵器杯B蓋に平城宮III以降顕著になる口縁部の屈曲がみられない。S E 2371では須恵器壺Bが出土している。S B 2363出土土器は平城宮II～IIIに相当する。須恵器杯B蓋の口縁部に屈曲があらわれるが、屈曲は顕著でなく、ほとんど屈曲のみられないものが主流である。S D 2281出土土器は平城宮Vに相当する。土師器杯・皿・椀はC手法で調整し、椀の外面に密なミガキ調整がみられる。S K 2286・S B 2263出土土器は平城宮VI(長岡宮併行)に相当する。土師器杯・皿の法量及び椀のミガキ調整は、延暦年間の本簡を出土した長岡京S D 1301出土土器⁽¹⁾に相当する。S B 2631出土土器は平城宮VIIに相当する。S B 2631出土土師器の皿Aは器高が2.6 cmで、S D 650 Aよりは平城宮VIIのS B 2631に近い。S D 2690及びS K 2379出土土器は平城京東三坊大路東側溝下層S D 650 A出土土器に相当する。土師器杯及び皿において、C手法が顕著なことから、灰釉陶器の杯・皿において内面全面のみに釉をかけることから、S D 650 A出土土器に相当する。

1 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第4集 1978年3月

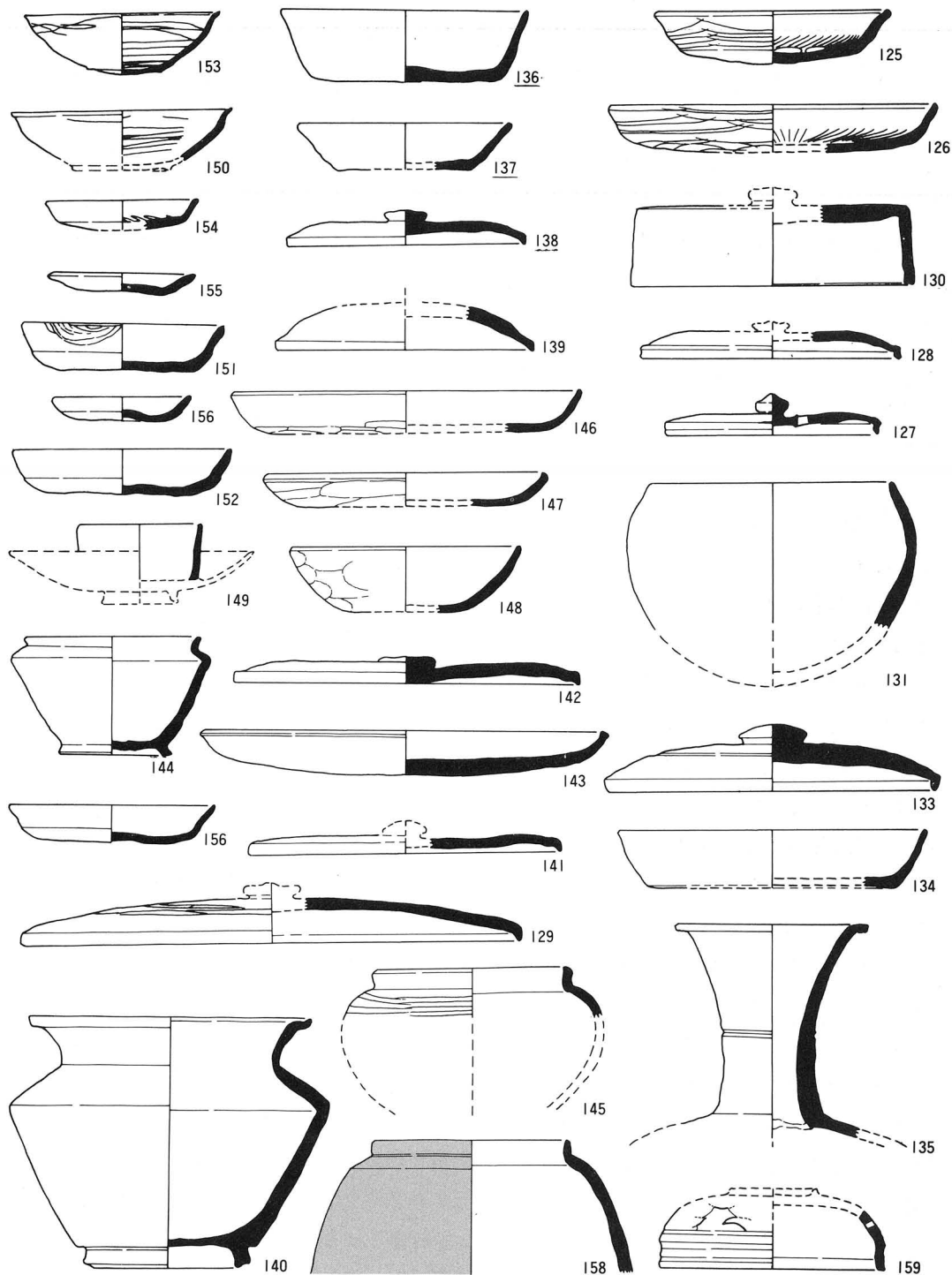


fig. 15 第3次西調査出土土器実測図 縮尺 $\frac{1}{4}$

S D2740(125~131)・S D2750(133~135)・S K2801(136)
 S B2363(137~139)・S K2810(140)・S K2870(141~143)
 S D2812(144~149)・S K2861(150~152)・S K2764(153)
 S K2720(154)・S K2732(155)・S K2726(156)・包含層(158~159)

2 瓦 埴 類

4 調査区から出土した瓦埴類は整理箱190杯分ある。内訳は軒瓦127点、施釉平瓦2点、熨斗瓦1点、埴20点のほかは丸・平瓦である。量は軒瓦・丸平瓦ともに3次西調査区が多く、同東調査区がこれに次ぎ、他調査区は少ない。ちなみに1 aあたりの軒瓦の出土点数を調べると、3次西調査区が11点、同東調査区が3点である。他の平城京内遺跡での1 aあたりの出土点数は、左京三条一坊十四坪が4点、左京一条三坊十五・十六坪が3点、左京三条二坊六坪が2点、左京三条二坊十・十五坪が1点となり、3次西調査区は京としては瓦の出土量がきわめて多いことがわかる。平城宮内では1 aあたり10点を越えることが多いが、これとほぼ匹敵する。しかし3次西調査区でも西部部すなわち左京二条二坊十三坪と十二坪との埴境小路付近がもっとも多いので、二次的な瓦の移動を考えると、多くの瓦類を使用していたのが十二坪内であるか十三坪内であるか確定的ではない。

A. 軒丸瓦 (P L.12~13、fig.16・17)^{註1}

16型式28種78点出土した。新出の型式が5種ある。

6131 A 6131は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁が細長く先端が丸い。中房は小さく弁区より一段突出する。外区外縁と内縁を画する界線がなく、内縁に珠文、外縁に凸鋸歯文をめぐらす。A・Bの2種がありAが1点出土した。Aには間弁がある。右京二条二坊十六坪・法華寺旧境内・法華寺阿弥陀浄土院に同範例がある。

6132 A 6132は単弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に珠文・外縁に凹線鋸歯文をめぐらす。中房が弁区より一段低い。A種のみがあり1点出土した。法華寺旧境内に同範例がある。

6133 Aa・Db 6133は菊華状の単弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に珠文をめぐらし外縁が素文である。A~D・I~Pの12種がありAaが1点、Dbが1点出土した。Aは弁端が尖り、弁数・珠文数が6133中最少である。蓮弁の輪郭線と子葉を一部彫り直したAbがある。Dは弁端が丸く、外区内縁と外縁を画す界線がない。蓮子の配置が均整でないのが特徴。中房が弁区と同一平面上にあるDaと一段突出させたDbがある。

6138 A・B・I・J 6138は単弁12弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁が短かく先端が丸い。間弁が三角形を呈し外区内縁に珠文をめぐらす。A~C・E~Jの9種があり、Aが1点、Bが1点、Iが2点、Jが2点、種別不明品が4点出土した。I・Jは新形式である。A・Iは蓮子が1+5で外区外縁が素文。Aは間弁が三角形で、Iは「人」字形に近い。Bは蓮子が1+5、外区外縁が線鋸歯文で弁端が丸い。Jは蓮子が1+6、外区外縁が素文で弁どうしが離れる。Fに似るが弁幅が狭く蓮子の間隔が狭い点で区別できる。I・Jともに瓦当裏面は平坦でへラケズリを施し、丸瓦の接合位置が低く接合線が浅い円弧を描く。Aが左京三条二坊六坪、Bが左京一条三坊十五・十六坪、同八条三坊九坪、東三坊大路、西一坊坊間大路西側溝、Iが左京二条二坊十二坪で出土しているほか、法華寺旧境内でB・

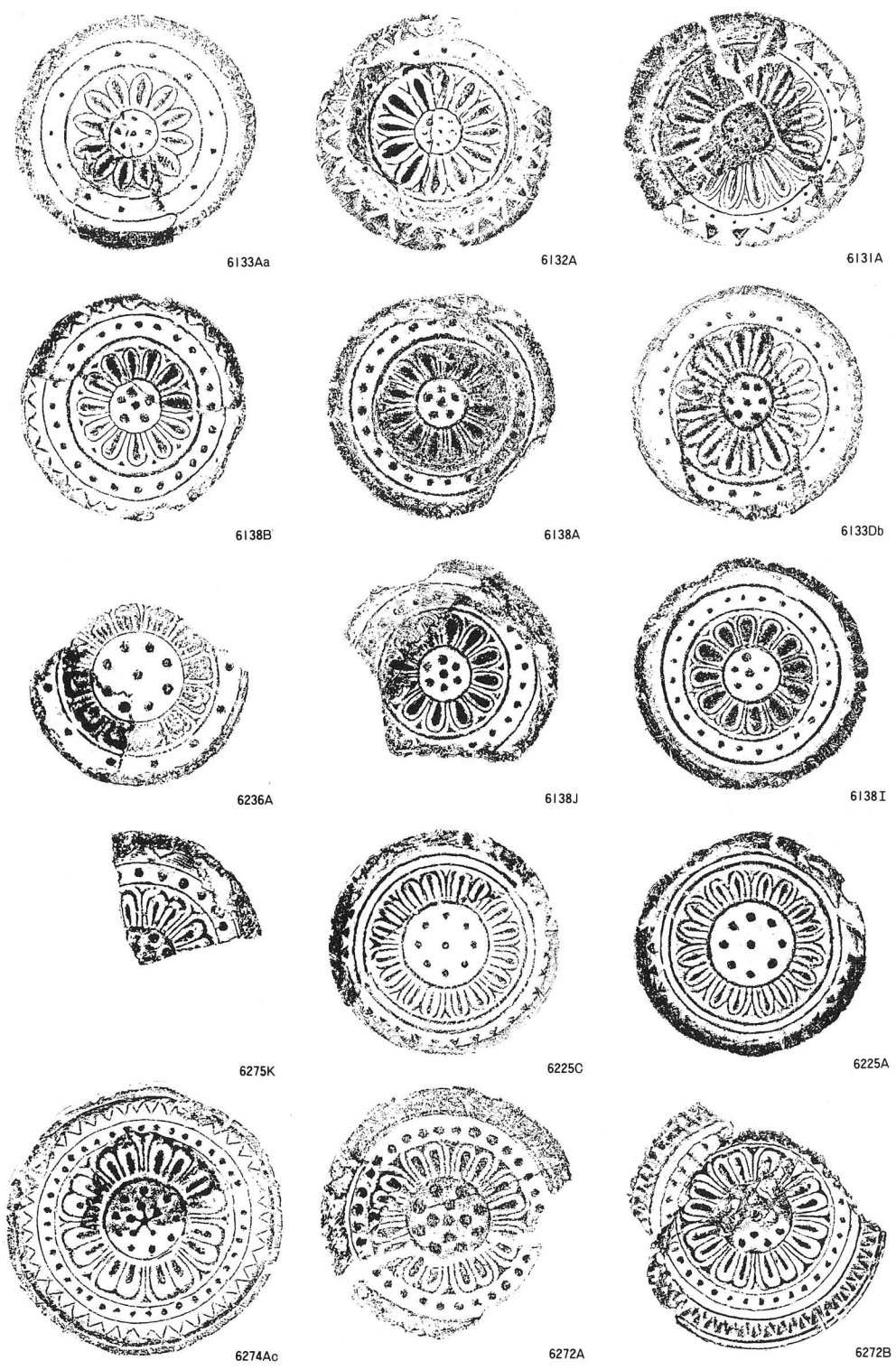


fig. 16 軒丸瓦拓本 縮尺 $\frac{1}{5}$

Iが、法華寺阿弥陀浄土院でB・I・Jが出土している。

6225 A・C 6225は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に二重圏線、外縁に凸線鋸歯文を置く。A～E・Lの6種がありAが3点、Cが2点出土した。Aは弁端が尖りCは丸い。

6236 A 6236は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房が大きく、蓮弁の2つの子葉が接し、弁の輪郭線が幅広い。外区内縁に珠文をめぐらし外縁が素文。A・D～Fの4種がありAが1点出土した。Aは弁数が多く弁幅が狭い。左京二条二坊十二坪、西大寺に同范例がある。

6272 A・B 6272は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+4+8の蓮子を置き、外区内縁に珠文、内縁より一段高い外縁に面違い鋸歯文をめぐらす。A・Bの2種がありAが1点、Bが5点、種別不明品が1点出土した。AはBより中房が突出し、珠文と外区外縁の間隔が狭く、外区外縁の傾斜が急である。Aが左京二条二坊十二坪、Bが左京二条五坊北郊、同三条二坊六・七・九坪で出土し、右京九条一坊十二坪・九条大路では両種が出土。

6274 A 6274は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で藤原宮式の一つ。外区内縁に珠文、外縁に細かい線鋸歯文を置き、蓮子の配置が1+5+9。蓮弁の反転が強いのが特徴。A・Bの2種がありAcが1点出土した。Aは中房が突出し蓮弁の反転がBより強い。Ab・Acがあり、Abは筥が磨耗し蓮子を囲む圏線が消滅した段階で、蓮子や外区内縁・外縁間の界線を彫り直す。Acは中房中央の蓮子と一重めの蓮子とを線で結ぶ。今回の出土品はAc。

6275 K 6275は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で藤原宮式の一つ。外区内縁に珠文、外縁に粗い線鋸歯文をめぐらし、蓮子は中央の1個の周囲に2重にめぐらす。A～E・G～K・Mの11種がありKが1点出土した。Kは新形式で、外区内縁の珠文の間隔が広い点の特徴的。瓦当裏面は平坦で、丸瓦の接合位置はやや低く、接合線は円弧を描く。

6282 Bb・Db 6282は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁を輪郭線で平板に表現し、間弁が互いに連なり界線状にめぐる。A・B・D～I・Lの9種があり、Aを除き中房中央の蓮子が大きく、外区内・外縁の界線が太いのが特徴。Bbが3点、Dbが1点出土した。Bは蓮弁が短かくDは小型品。ともに子葉が間弁とくつつかないaとくつつくbがある。

6291 A 6291は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁の形状が後述の6308と似るが、間弁が互いに連なり蓮弁の輪郭線に沿ってめぐる。外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。A・Bの2種がありAが1点出土した。Aは内区が盛り上り、蓮子の配置が1+6。

6308 A・I 6308は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、間弁が独立し、中房が弁区より突出する。外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文を置く。A～D・H～J・L・Nの9種があり、Aが1点、Iが5点出土した。Aは珠文・線鋸歯文が16個。Iは新形式で、珠文が22個、線鋸歯文が16個でDに似るが、Dより中房と弁幅が大きく、蓮子・間弁・珠文の位置関係が異なる。瓦当裏面中央をやや窪ませ粗くナデを施し、縁辺部にヘラケズリを施すのが特徴。丸瓦の接合位置が高く、接合線は深い円弧を描く。左京二条二坊十二坪に同范例がある。^{註2}

6311 A・B・F 6311は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、6308に似るが中房が弁区より低いのが特徴。A～Hの8種があり、Aが6点、Bが3点、Fが1点出土した。Fは新形式。A・

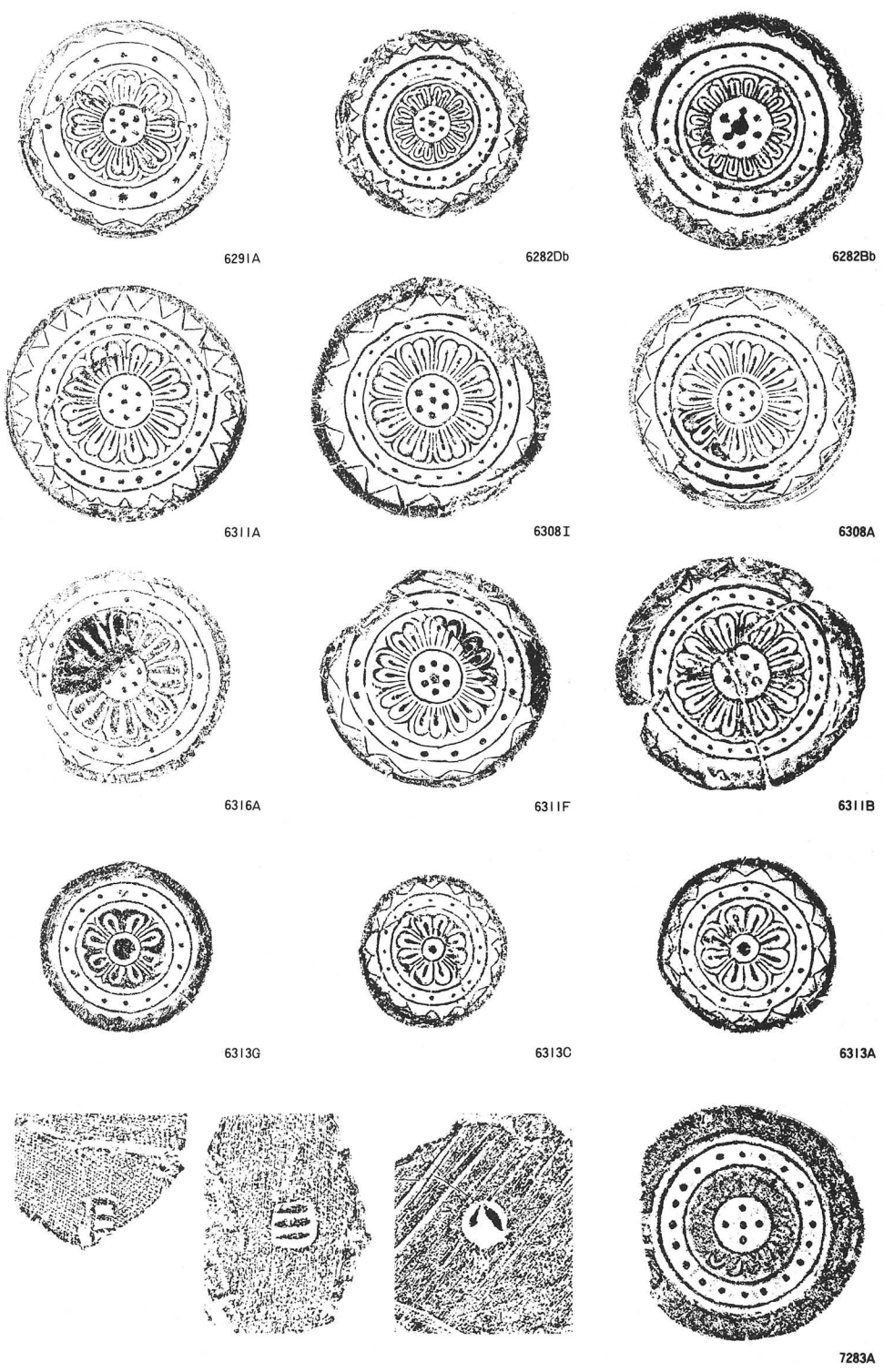


fig. 17 軒丸瓦拓本(縮尺 $\frac{1}{6}$)・文字瓦拓本(縮尺 $\frac{2}{5}$)

Bともに蓮弁の反転が強いが、Aは弁端が高く反り上り、Bは垂れ下がる。Fは蓮弁の反転が弱く、珠文が16個、線鋸歯文が22個でCに似るが、中房がやや大きく、内区が低く盛り上り、間弁の先端が大きく枝分れする点で異なる。瓦当裏面は平坦でナデを施し、丸瓦の接合位置は低く、接合線は円弧を描く。法華寺旧境内に同范例がある。

6313 Aa・C・G 6313は小型の複弁4弁蓮華文軒丸瓦で、蓮子が1個しかない。外区内縁に珠文をめぐらす。A～Gの7種があり、Aaが5点、Cが6点、Gが1点出土した。Aは蓮弁の反転が強い。范を彫り直し内区全体を盛り上らせたAbがある。CはAより一回り小さく蓮弁の反転が弱い。Gは新形式。外区外縁が素文で、内区が高く盛り上る。瓦当裏面は平坦でへラケズリを施し、丸瓦の接合位置が高く接合線は深い円弧を描く。

6316 A 6316は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、間弁がなく、子葉を画す弁の中心線がない。外区内縁に珠文を置く。A～Kの11種がありAが1点出土した。Aは蓮子の配置が1+7で均整でない。蓮弁が細長く外区外縁に線鋸歯文をめぐらす。東三坊大路に出土例がある。

7283 A 7283は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房が弁区より一段低く、外区外縁が素文の直立縁で内縁に珠文をめぐらす。蓮弁は2本の輪郭線であらわす。瓦当裏面は平坦でナデを施し、丸瓦の接合位置はやや低い。東三坊大路、法華寺旧境内に同范例がある。

B. 軒平瓦 (PL.14・15、Fig.18)

13型式19種49点出土した。新出の型式が3種ある。

6640 A 6640は扁行唐草文軒平瓦で、唐草の左5単位が左偏行、右4単位が右偏行である。上外区に珠文、脇区・下外区に線鋸歯文を置く。A種のみがあり2点出土した。顎は段顎。左京四条二坊一坪、東三坊大路に同范例がある。

6643 C 6643は左偏行唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。A～Eの5種がありCが3点出土した。Cは珠文がやや大振りで支葉の巻き込みが強い。顎は段顎。

6663 B・C 6663は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、内・外区の界線が二重にめぐる。中心飾が花頭形で基部が界線にとりつく。A～F・H～Nの13種があり、Bが1点、Cが2点出土した。Bは唐草左右第三単位第二支葉の隣りに小珠点を置く。段顎・曲線顎の2者があるが今回の出土品は曲線顎。Cは唐草右第三単位第一支葉を欠く。顎は曲線顎。

6664 F・K 6664は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾が花頭形で唐草左右第三単位主葉が界線にとりつく。顎は段顎。A～D、F～Pの15種があり、Fが4点、Kが1点出土した。Fは中心飾の基部が界線にとりつく。Kは中心飾の基部が界線にとりつかず、唐草左右第三単位大きさが第一・第二単位とほぼ等しい。

6682 B 6682は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾が逆「十」字形で、唐草左右第三単位第一支葉が巻き込む。A～Cの3種がありBが1点出土した。Bは新形式で、中心飾が扁平、唐草基部が界線に接さず、唐草左第三単位第一支葉の巻き込みが小さい。顎は段顎。桶巻作りで製作され、平瓦部凸面に横位縄叩き目を残し、

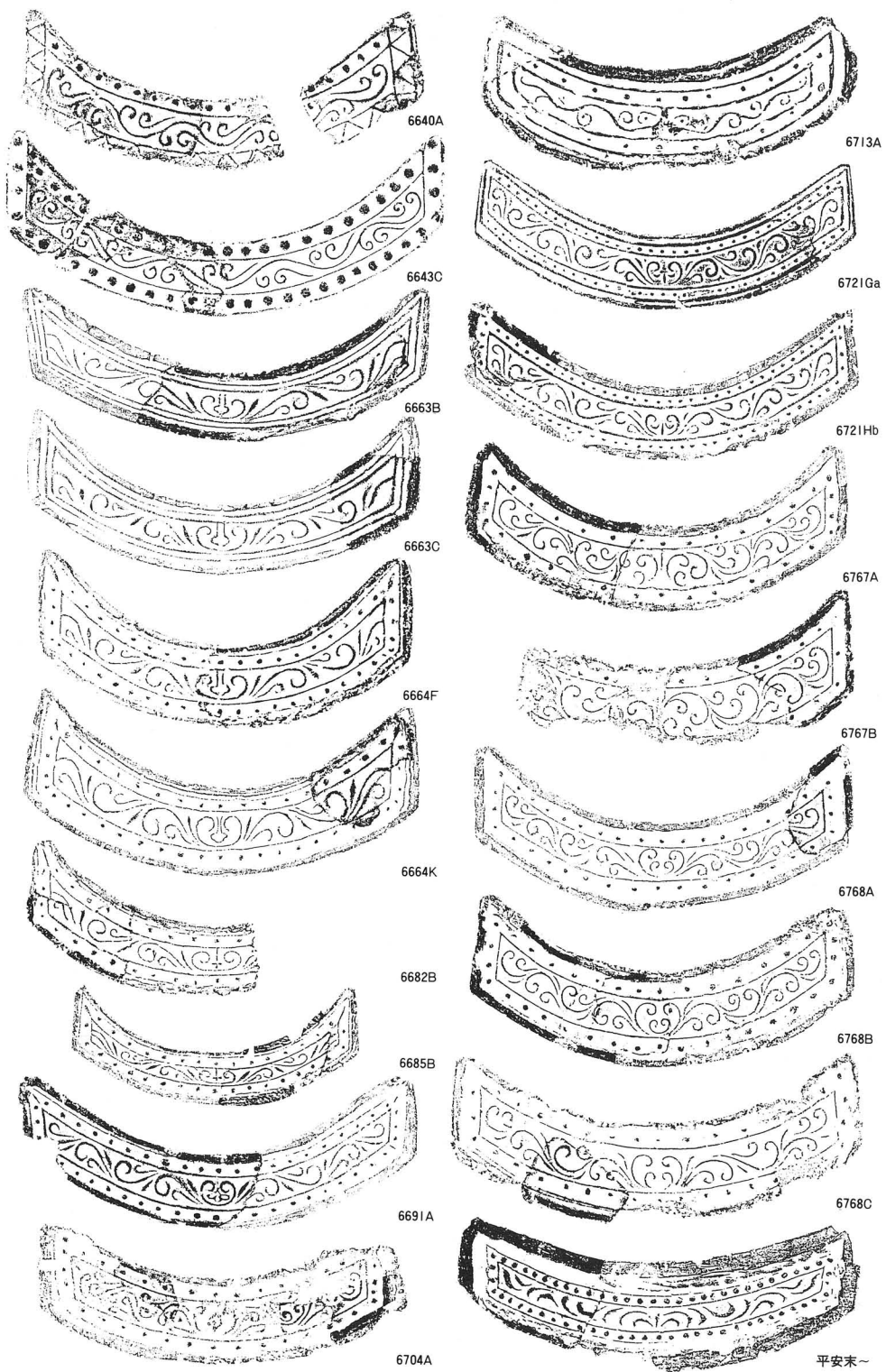


fig. 18 軒平瓦拓本 縮尺 $\frac{1}{2}$

凹面は横位のナデで布目を消し、瓦当近くに横位のへラケズリを施す。左京二条二坊十二坪、同三条一坊十四坪、同三条二坊十坪・十五坪に同范例がある。

6685 B 6685は6682の小型品で、唐草左右第三単位第一支葉が脇区界線にとりつく。A～Eの5種がありBが3点出土した。Bは瓦当が最小で脇区の珠文が1個。顎は段顎。

6691 A 6691は4回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾が三葉形を呈する。A～Dの4種がありAが2点出土した。Aは中心飾の基部上端が二又に分れ界線に接しない。唐草が横長で巻きが弱い。顎は曲線顎。

6704 A 6704は4回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾が「中」字形。唐草の主葉と支葉の区別が不明瞭で先端が小さく巻き込む。顎は曲線顎。A種のみがあり2点出土した。

6713 A 6713は5回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に粗く珠文を置く。中心飾が逆心葉形で、唐草には支葉がない。A種のみがあり7点出土した。顎は曲線顎。一枚作りで製作され、平瓦部凸面は縦位のナデの後に縦位のへラケズリを施し、凹面は未調整で布目を残すが、瓦当近くと側縁近くにへラケズリを施す。左京一条三坊十五・十六坪、法華寺旧境内、法華寺阿弥陀浄土院に同范例がある。

6721 Ga・Gb・Hb 6721は5回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾が「小」字形ないし逆「小」字形で外区に密に珠文を置く。A・C～Kの10種があり、Ga・Gb・Hbが各1点出土した。Gaは外区の珠文の外側にさらに界線をめぐらす、Gbはその界線を削り取り直立縁にかえる。顎は曲線顎。Hは内区文様がGに似るが脇区に珠文を置く。脇区の上端に珠文がないHaと珠文を追加するHbがある。顎は直線顎。

6767 A・B 6767は3回反転の均整唐草文軒平瓦で外区・脇区に珠文を置く。中心飾は直立する針形を中心にその左右に下から上へ巻き込む支葉を数個配す。各唐草には支葉が3つつある。顎は曲線顎。A・Bの2種があり、Aが7点、Bが4点出土した。Bは新形式で、Aより唐草が大きく巻き込みも強い。A・Bともに一枚作りで製作され、平瓦部凸面に縦位の縄叩き目を残し、顎部に横位のナデを施す。凹面には布目を残し、瓦当近くに横位のへラケズリを施す。A・Bともに法華寺・法華寺阿弥陀浄土院に同范例がある。

6768 A・B・C 6768は4回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区・脇区に珠文を置く。中心飾は花頭を持たず二重の中心葉からなる。顎は曲線顎。A～Dの4種があり、Aが1点、Bが3点、Cが1点出土した。Aは内区幅が狭く唐草の巻きが小さい。Bは新形式で、中心飾の内側の中心葉がくっつき、唐草の巻きが大きい。Cも新形式でA・Bより唐草が大振り。3者ともに一枚作りで製作され、平瓦部凸面に縦位縄叩き目を残し、顎部は縦位ナデの後に横位ナデを施す。凹面は布目を残し瓦当近くに横位のへラケズリを施す。左京二条二坊十四坪でB・C、東三坊大路でA、法華寺・法華寺阿弥陀浄土院でA・Bが出土。

平安時代末以降の軒平瓦 棒状の中心飾をもつ4回反転の均整唐草文軒平瓦が1点ある。外区外縁が直立縁で顎は深い段顎である。興福寺食堂の養和再建時(1181)の軒平瓦の文様系譜を^{註3}引き、法華寺・新薬師寺・安倍寺・東大寺・元興寺に類例がある。

C. その他の瓦埴類

丸・平瓦 整理箱183杯分ある。平瓦には1枚作りによるものと桶巻作りによるものがある。ともに凸面に縦位の縄叩き目を残すものが圧倒的に多い。そのほか桶巻作りによるものには以下の4種がある。1. 凸面に横位のハケメを施す。23点あり、うち4点は縦位の縄叩き目が残るが、他は叩き目をハケメで消し去る。2. 凸面に斜格子叩き目を施す。5点あり、うち1点は叩きの後に縦位のヘラケズリを施す。3. 凸面に平行叩き目を施し、凹面は縦位のナデで布目を消す。1点ある。4. 凸面に横位の縄叩き目を施す。3点ある。このうち1・2は厚手で焼成が甘く、3・4は薄手で比較的焼成が良い。また1枚作りによるもので、成形後に縦位のヘラケズリを施すものが3点ある。丸瓦は、凸面に縦位のナデを施し叩き目を消し去るものが多いが、縦位の縄叩き目を施した後に横位のナデを施すものと未調整のものが少量ある。

施釉平瓦 長さ14cmの破片と5cmの破片が1点ずつ出土した。瓦当の凹面と狭端面に緑釉と黄釉を施す。側縁から2～3cmの範囲には施釉しない。平瓦は厚さ1.3cmと薄手で、凸面に縦位の縄叩き目を残し、凹面はナデる。胎土は精良で淡黄白色を呈し、焼成は甘い。

熨斗瓦 1点出土した。平瓦製作後、生乾きの段階で分割してつくる。幅は10cm、長さは不明である。凸面に縦位の縄叩き目、凹面に布目を残し、側面・端面は平滑にナデる。

文字瓦 3点ある。いずれも刻印を押捺したもので、「ハ」「目」「三」が各1点ある。「ハ」は新種。径1.5cmの円形の刻印で陽刻（瓦面での状態）である。平瓦の凹面の側縁から4.5cm、狭端縁から3.5cmの位置に押す。字の向きは平瓦の長軸に対し斜めで、広端縁側が上である。「目」も新種。長辺1.7cm以上、短辺1.4cm以上の縦長の刻印で陽刻である。丸瓦の玉縁の内面の側縁から3.2cm、端縁から4.1cmの位置に押す。字の向きは丸瓦の長軸に対しほぼ直交する。「三」は一辺1.6cmの隅丸方形の刻印で陽刻である。丸瓦の凹面に押し、字の向きは丸瓦の長軸に平行する。京都府音如ヶ谷瓦窯に出土例がある。

埴 破片が20点ある。3次西調査区西半部に多い。全形を残すものはないが、長辺22.5cm以上、短辺17cm、厚さ7cmの長方埴が1点ある。

D. 遺構に伴って出土した瓦埴類

以上A～Cで説明した瓦埴類のうち、遺構から出土したおもなものは以下の通りである。後述する遺構の時期区分に従って時期別に示す。A期、S K 2270→6313、S D 2740→6132 A・6272 B・6311 A・6664 F・熨斗瓦・埴、S D 2750→6282 B b、S K 2800→6272 B。C期、S D 2281→6308 I、S K 2287→施釉平瓦、S D 2812→6282 B・平安時代末以降軒平瓦・施釉平瓦。E期、S K 2379→6308 I、S B 2670→6713 A、S K 2680→6274 A c・6275 K・6664 K・6713 A・7283 A・埴、S K 2690→6282 B・6282 D b・6713 A、S D 2699→6663 C。F期土壇→6138 A・6225 A・6272 B・6282 B b・6308 I・6311 A・6313 C・6643 C・6663 C・6691 A・文字瓦「目」。

E. 軒瓦の時期と組合せ

今回の調査では、従来時期不明であった軒瓦の年代を確定したり、平城宮出土軒瓦編年^{註4}を改訂したりするための資料は得られなかった。そこで出土した型式の年代を従来の編年に基き示した(tab.4)。組合せは、出土した型式数が多い割には型式毎の点数が少ないため決定しにくい。第Ⅲ期以前については平城宮での組合せを参考に、6311A・B-6664F、6313A・C-6685B、6225A・C-6663B・C、6282B・D-6721G・Hの組合せが考えられる。第Ⅳ期では6138と組むのが6713・6767・6768の中のどれであるかが問題となる。いずれも天平宝字年間(757~764)に造営された法華寺阿弥陀浄土院跡で出土する^{註5}。このうち6713Aは阿弥陀浄土院創建時に軒瓦を供給した京都府音如ヶ谷瓦窯跡では出土しておらず、創建時の軒平瓦6714Aの文様系譜を引きながらもかなり退化している^{註6}ので、時期が下る可能性が大きい。今回の調査でも、6138・6767・6768が3次西調査区西端部のみで出土するのに対し、6713Aは3次東調査区のみで出土することから、6138-6767ないし6768の組み合わせが考えられるがこれ以上特定できない。いずれにせよ阿弥陀浄土院での組み合わせ6138B-6714Aとは異なる。

F. 当調査区出土軒瓦の様相 (tab.4)

はじめに述べたように、軒瓦の大半が3次西調査区西半部で出土しているため、今回の出土資料を用いて左京二条二坊十三坪での軒瓦の様相を語ることは困難であるが、二三の問題点を指摘する。近年の平城京の調査によって、平城宮ではあまり出土せず平城京独特の瓦当文様を有す軒瓦の種類が増加し、宮所用瓦とは別個に生産・使用されたと考えられている。これが官により平城京造営用として作られたのか、貴族の邸宅用が含まれるのか、後者の場合でも供給が官によるのか私的になされたのかの解明が目下の急務である。また、京内でまとまった量の瓦を出土する地域での軒瓦の様相には2類型あることが判明している^{註7}。すなわち類型Ⅰは各時期にわたって平城宮所用瓦の同範品が使用され、平城宮と異なる軒瓦がほとんど出土しない地域、類型Ⅱは平城宮内で未出かあまり出土しない軒瓦が主体を占める地域である。各類型とりわけ後者の性格付けが今後の課題である。

当調査区出土軒瓦は、第Ⅲ期以前は類型Ⅰであるが、6272A・B、6308I、6313G、6682Bは平城宮で未出である。平城京独自の瓦当文様を有す軒瓦の初現は、確実には第Ⅱ期であり^{註8}、神亀元年(724)の邸宅への瓦葺き奨励を反映したものと指摘されている。6308I・6313G・6682Bも第Ⅱ期に属す例としてよかろう。しかし、平城京独自の軒瓦の初現が第Ⅱ期に収まるかどうかは検討を要する。たとえば1983年の左京四条二坊一坪の調査では6348A-6675Aの組合せが得られた^{註9}。両者ともに平城京で多く出土し、文様の特徴は第Ⅰ期に遡る可能性がある。また、6272は1980年の九条大路の調査で右京九条一坊十二坪の南辺築地付近から多く出土し、観音寺所用瓦の可能性も考えられている^{註10}が、近年平城京内各所で出土例が増加した。瓦当文様の特徴は藤原宮式に属し、藤原宮所用瓦の再利用かもしれ

	左京二条二坊十三坪(当調査区)		法華寺阿弥陀浄土院跡		京都府音如ヶ谷瓦窯跡	
	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦
第Ⅰ期 708 } 721	6272A・B 6274Ac 6275K	6640A 6643C 6664K				
第Ⅱ期 721 } 745	6291A 6308A・I 6311A・B・F 6313A・C・G 6225A・C	6664F 6682B 6685B 6663B・C				
第Ⅲ期 745 } 759	6133Aa・Db 6282Bb・Db 6316A	6691A 6721Ga・Gb Hb				
第Ⅳ・Ⅴ期 759 } 784	6138A B		6138A B F		6138B F G	
	I J		H I J		6137C	
	6236A		6236D	6714A 6716A 6725A	6714A 6716A	
		6767A B 6768A B C		6767A B 6768A B	6767A B 6768A B D	
時期不明	6131A 6132A	6704A 6713A	6131A 6296B 6713A			

tab. 4 軒瓦の編年および同范関係

ないが、今の所藤原宮では出土しておらず、平城京独自の軒瓦の候補となる。

第Ⅳ期には、当調査区出土の軒瓦の様相は類型Ⅱへと一変し、しかも軒瓦のほとんどが法華寺阿弥陀浄土院跡出土の軒瓦と同范関係を有す点が注目に値する。阿弥陀浄土院と密接な関係を有した施設が付近に存在したと考えてよからうが、その場所の確定は左京二条二坊十二坪東半部の調査を待って検討しなければはらない。

- 1 記述にあたっては奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を使用する。番号のつけ方等詳細については同研究所『基準資料Ⅰ瓦編1』(1973年)の解説を参照されたい。なお、平城宮で未出の型式、および平城宮でほとんど出土せず平城京で出土例のある型式の、京内での出土地を略記しておく。
- 2 1983年に奈良市教育委員会が調査した。出土瓦整理担当の中井公氏から御教示頂いた。
- 3 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集Ⅵ』(奈文研1980)。
- 4 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ瓦編2解説』(奈文研1975)。『平城宮発掘調査報告ⅩI』(奈文研1982)。
- 5 『昭和47年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報(2)』。(奈文研1973)
- 6 森郁夫・吉田恵二「平城ニュータウン地域内遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(京都府1974)。
- 7 『平城京左京三条二坊』(奈文研1975)。
- 8 「平城京左京三条二坊九坪発掘調査概要報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書(昭和54年度)』(奈良市1980)。
- 9 『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』(奈文研1983)。
- 10 『平城京九条大路一県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ-』(奈文研1981)。

3 木漆器、金属製品

A 木製品 (PL.16、fig.19)

木製品は大半が小路の東西両側溝 S D 2740・2750から出土し、少数が土壇から出土した。その絶対量は多くはなく、祭祀具、紡織具、その他に分けることができる。

祭祀具 齋串^{ゆくし}と刀形がある。齋串(1)は、板目にとったスギの薄板の一端を圭頭状に削ったもので、側面に切りこみはない。下端部が打損し、全長は不明。現存長13cm、幅1.8cm、厚さ0.1cm。西側溝出土。刀形(2)は刀身を模したもの。刀身部は反りをもたせ、切先の一部を両刃風^{しのぎ}に削るが、刃は作らず、鑄^{まち}もない。茎との境は片関とする。形を似せるのみで、削りなども雑である。ヒノキ。全長26.7cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm。西側溝出土。

紡織具 糸車の梓木(5)がある。ヒノキの角棒を用い、梓木内面の上下二箇所に横木を挿入する柄穴があり、柄穴間の内面を内反りに削りこむ。柄穴の間隔は11.9cm。一方の柄穴以下を欠損するが、復原全長は30cmである。梓木の端部は若干削り細める。幅1.8cm、厚1.1cm。西側溝出土。

その他 車輪の部品(8)は、アカガシ亜属の板目材を用いたもので、両面に一定の曲率をもって作る。一端部には出柄を作り、他端部は破損しているが、方孔を作る。この方孔は、原形では中央部にあったのであろう。彎曲する外面は磨滅痕が著しい。内面は平らに作る。側面は、一方の面のほぼ中央に、長軸に平行する鑄をつけるが、他方は不明確である。現存部全長は10.3cm、最大幅4.7cm、厚さ2.1cm。出柄は木口の中央にあり、長さ、幅とも1.3cmで、かなり磨耗している。他端部の方孔は、幅1.7cm。本例に類似した遺品は、平城京左京一条三坊の東三坊大路東側溝 S D 650(奈文研『平城宮跡発掘調査報告Ⅵ』奈文研学報第23冊)から出土し、車輪の一部とされている。ここでは、本例に類似した部品Aと、一端に入り柄を作る部品Bがある。その復原案では、車輪は内輪と外輪があり、部品Aが内輪に、部品Bが外輪になる。各々の中央部の方孔は車輪の輻^やを受ける柄穴となる。ただ、S D 650の部品Aは彎曲する外面に磨滅痕が見られないこと、内面中央には長軸に平行する鑄を作る点、本例とは異なる。本例は外面が磨滅している点や内面が平らであることを考えると、外輪の可能性もある。フォーク状木器(9)はヒノキの板目板から身と柄を作ったもので、身の先端を二又とする。先端部は磨滅痕が見られる。柄は身の幅をゆるやかに狭めて作る。一部に割面を残すが、全体的によく削り調整している。柄の先端部を欠損するため、全長は不明。現存長25.5cm、幅4.8cm、厚さ1.4cm。東側溝出土。杓子状木器(10)はヒノキの板目板から柄と身を作る。身の途中から折損するが、現存部からみて、先端部は斜にそぎ落していたようである。身と柄の境は明瞭な肩を作る。両面とも割面を丹念に削り調整。復原全長39cm、幅5.1cm、厚さ0.7cm。東側溝出土。部材(4)は、全長11.2cm、上幅2.7cm、下幅1.8cmのヒノキの薄板材で、上端から1mのところ¹に長軸に直交する溝を彫りこみ、側辺も浅く削りこむ。

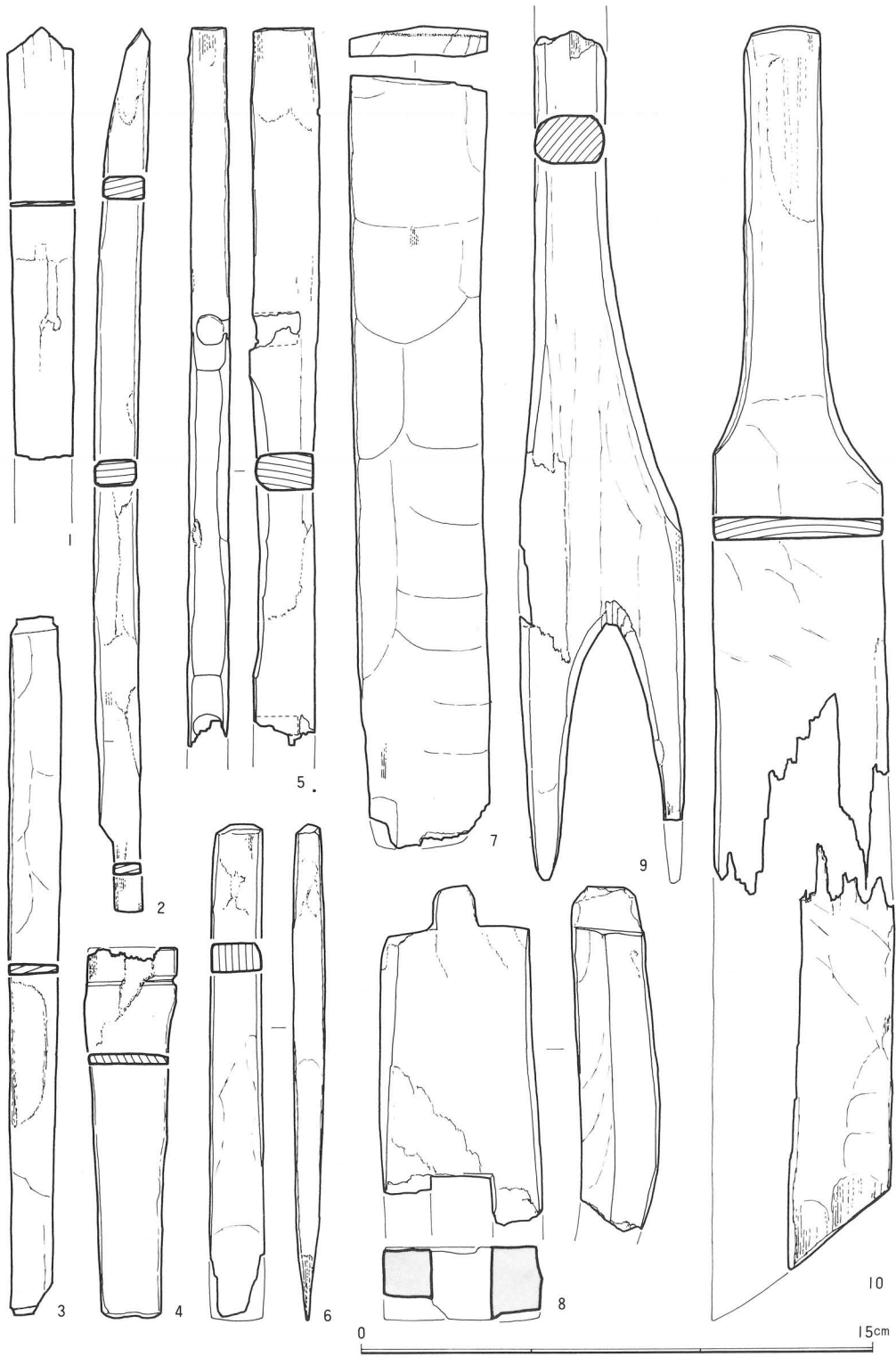


fig. 19 木製品実測図

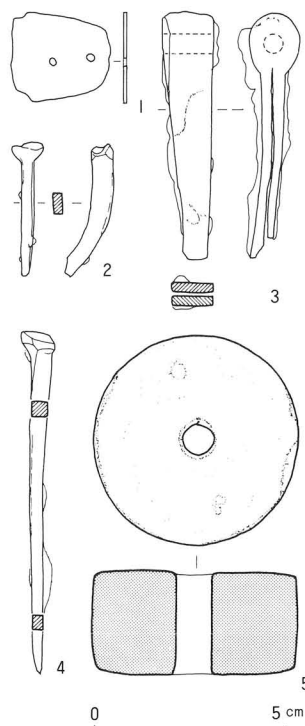


fig. 20 金属製品他実測図

B. 金属製品・他 (fig.20)

金属製品は、銅製品、鉄製品、銭貨がごく少数ある。

帯金具 鈔帯の鉸具(1)が1点ある。板金具の破片で、2
鉄留の痕跡がある。最大縦幅2.55cm、厚さ0.1cm。建物S
B2621の西端柱掘形出土。

鉄釘 3点ある。環頭釘(3)は叩き伸ばした足を両面から
合わせ、頭部を環状に作った釘。足の先端を欠損する。土
坂SK2747出土。折頭釘(8)は足の末端を平らに叩きのば
してから折り曲げたもの。全長9cm。包含層出土。

銭貨 和同開珎と宋銭が各1点ある。和同開珎は、開の字
の門構えの上部が隸書風に開いた「隸開和同」である。宋
銭は元豊通宝である。和同銭は小路西側溝SD2750から、
宋銭は包含層から出土。

土製品他 土製円盤(5)は、直径5.5cm、厚み2.7cmの中央
に0.8cmの孔を穿つ。灰黄色を呈し、黒い斑点が浮き出
ている。東西溝SD2699出土。この溝からは東三坊大路東側
溝SD650出土品に類似の灰釉陶器が出土しており、この
製品も9世紀代であろう。石鏃はサヌカイト製の凹基鏃で、
先端部のみ折損する。長3.6cm、最大幅1.65cm、重量2.1g。
作りや形からみて、弥生時代中期初期のものであろう。

C. 鍛冶関係品 (fig.21)

鍛冶関係のとりべ、鞆の羽口は、G区からまとまって出
土した。

とりべ 片口のとりべ(1)の大破片がある。復原すると直
径12cm、高さ5.6cmの小型品。胎土には直径0.8cmの小石
を含む。表面には整形時の痕跡を留める。口縁端近くに沈
線がめぐる。口縁端部と片口のまわりは火熱により変色し、
一部が熔解している。

鞆の羽口 鞆から炉に直接風を送る羽口は完形品が一点も
なく、5箇体分が復原できた。図示例は、先端部の破片で、
表面に、長軸に平行した18・9の稜をのこす。曲率のある
細長い材をあてて成形したのであろう。先端は熔解し、一
部が濃青緑色に変色している。外径はともに7cm。内径は
1が2.8cm、2が2.4cmである。

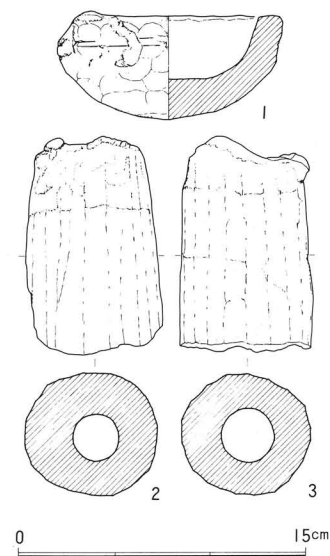


fig. 21 とりべ・ふいご羽口
実測図



fig. 22 漆絵

D. 漆絵 (PL.17、fig.22)

3次調査区の包含層から文様を針書した漆器破片が出土した。漆器は木質部が失われ、両面の漆膜のみが遺存。文様は表にのみある。両面とも素地に布着せを行う。表には、この布が現存、1cm平方当りの経糸が17本である。裏面は膜面に圧痕のみが残る。X線写真では織目が非常に細く、絹織物の可能性がある。表の漆膜は、下端付近に布の端部があり、これが弧状を呈すことや、その外縁の刷毛目の方向からみて、この下端部が器物の端部に近いことがわかる。また、外縁の径は40cm前後に復原できる。盆か容器の蓋であろう。

文様は、細い針書で唐草と鳥を描く。唐草は外縁に沿って左から右に流れ、途中で外縁に沿う唐草と、中心部に向う唐草が分岐する。唐草の両側には次々に支葉が反転してゆく。支葉の表現はかなり退化している。右端には鳥の足が描かれ、その上方にも足と羽毛の一部が見え、片足で立つ状態を示す。全体を4分割し、中心部と周囲に鳥(伽陵頻伽?)を配し、間を反転する唐草文で埋める、対称性の強い構図か。退化した表現とはいえ、構図や遺跡の状況からみて、奈良末・平安初期を大きく下ることはないであろう。

4 木 簡 (PL.18)

木簡は合計4点出土している。出土地区はいずれも第3次西区であり、他の地区からは出ていない。出土遺構は(1)~(3)の3点が12・13坪の坪境小路東側溝(SD2740)から、(4)は中世の土取り穴(SK2770)から検出した。但し、(4)の木簡も内容や書体からみて奈良時代のものであるから、土取りに際して付近の土中にあった木簡が入り込んだのであろう。

以下、個々の木簡の内容を見ていく。

(1) □□□

□五□

受□

鑑□

※13×(61)×3

6019

材の木目を横にして文字を書いている。天地は削って調整しているので、元来は幅の広い木簡であったのを二次的に削ったものであろう。材を横にして書く例は平城宮出土木簡の中にもかなりみられ、何行かにわたる帳簿様の文書木簡が多い。この木簡も「鑑」の授受に関する文書木簡であろう。鑑(カギ)の事例としては、諸司の公文を入れた庫の鑑・諸司の品物を出し入れする蔵の鑑・武具等を収納する兵庫の鑑、それに特殊なものとして大蔵の鑑や中務省に保管される諸国の不動倉の鑑などが考えられる。

(2) 舟越海松一古

116×15×4

6051

「海松」は海藻の一種の「ミル」である。「舟越」は地名で、志摩国英虞郡船越郷のことであろう。志摩国は延喜式によれば海松の貢進国であり、また平城宮出土木簡にも「志麻國英虞郡船越郷戸主大伴郡□□
海松六斤」(『平城宮木簡二』2776)といった例があり、奈良時代でも海松の貢進を確認できる。「一古」という単位は「一籠」と同じで、籠に入った量を示す。籠の大きさは延喜内膳式によると、長さ1尺2寸、広さ8寸、深さ4寸とある。令の規定では、海産物の負担量は斤・両の重量で表わされるか、斗・升の容積で示されるが、実際には物品の形状に応じて連・編・籠といった単位で貢進されることも多い。海松も通常6斤が1籠に相当するから、平城宮出土のものも(2)の木簡もともに籠に入った同量の単位なのであろう。(2)は一たん貢進された海松を保管・整理するために付けられた物品付札であり、使用の際に廃棄されたものと推定される。

(3) 表裏両面に墨痕があり、表は「𠂔」「𠂔」などと見えるが判読しえない。あるいは習書かも知れない

(121)×(16)×4

6081

(4) 伊豆國賀茂郡□□□〔郷カ〕□□□

(141)×(13)×6

6039

下半分が欠けているために断定はできないが、上端の側面に切り込みが入っていること等から考えると、伊豆国から貢進された物品に付けられた貢進物荷札であろう。和名抄によれば、同国賀茂郡には賀茂・月間・川津・三嶋・大社の各郷が存在するが、そのいずれとも決めがたい。

※数字は縦×横×厚さ(単位ミリメートル) 木簡の型式番号